

私は本當に「蒲團」の女主人公 てせうか

私があの有名な、現文壇の元老田山花袋氏の出世作たる小説「蒲團」のヒロインであり、明治文壇掉尾の大傑作だと推稱された「縁」のヒロインなことは、あまねく天下に隠れない噂さて、現在作者たる田山先生それ自身が、さうだと發表されて居る以上、それに就いてなにか書くのは、蓋し當然のことに違ひありません。

ですが私は本當に「蒲團」のヒロインなのでせうか。

「蒲團」、「縁」及び私

永代美知代



成る程私は同じ作者の「妻」と云ふ小説の終りの方に出る来る、文學好きの田舎娘が、其崇拜してゐる都の小説家を頼つて上京すると云つた身の上でした。師と頼むその作家を神様のやうに信じて、崇拜して、崇拜の極、なつかしい餘りに、遠く先生の故郷にまであかくがれ歩くと云つた有様でした。それから先生の嫌ひな青年とラブもしました。

私たちの戀のいきさつは「蒲團」によく似た筋道でした。

「蒲團」が初めて春陽堂の新作小説の、巻頭小説として載せられた時、私は淋しい田舎の山蔭の町でテブスを

病んだ病後の胸ををどらせながら、遙かに都て入釜し
いその作の噂に就いて氣を揉んで居りました。師た
る田山氏からも手紙で挨拶がありました。勿論その頃
の私は、まるでもう先生と云へば神様同様尊いもの
に思ひ込んでゐましたので、その作に依つて變に誤解さ
れて行く戀人の身の上と云つた風な事に考へ及ぶ譯も
なく、まして自分自身の名譽だとか、運命だとか、
如何毀損され、如何影響されようとも、一向平氣なも
のでした。と云ふよりも、如何なつても好い位に思つ
て居りました。そして何と云ふ可愛相な程無邪氣な女
でしたらう？ 確か早稲田文學か何かに載つた、田山氏
の大膽なる告白云々と云ふ批評文に對して「先生は何
處までも温情なる戀の保護者でゐらつしやる『蒲團』
に書かれた事實——女弟子を心ひそかにラブして、戀
の嫉妬から相手の男に對する憎しみの感情とか、二人
の上に取つた所置とか、さうした事はほんの小説で、
實際の先生は、それは嚴格な先生だ」と辯解がましい
ものを、その當時の青年雜誌に寄稿したりしたもの

した。

實際師としての田山氏の態度は嚴格なものでした。
ツルゲネーフだの、モーパッサンだの、先生の書齋で
教はる作物には、兎角ラブ物語が多かつた。自然先生
の眼は輝いて見えました。然し、然し、藝術に熱し切
つた私には、殊には神様とも見る先生の胸に、さうし
た情火が燃やされて居ようなどは、一切測り知るこ
とも出来ませんでした。

ですが「蒲團」の主人公が女弟子をラブしての煩悶
だの、其戀人に對する態度などについても、何等疑ひ
をさしはさむやうな心も起りません。唯戀人にわざと
らしい上方辯を使はせたり、女の腐れたやうな、如何
にも意氣地のない、厭味一方な男と思はれるやうな書
き方をされてゐるのを、残念に思つたばかりでした。
熱した慾目で、私一人にさう思はれるのかも知れませ
んけれど、京都から初めて上京した戀人は、成程上
方流のアクセントで話しましたが、「蒲團」の中にあ
るやうな、あんなデレ／＼した言葉つきの男ぢやあり

ません。つまり萬事に世馴れない、世の中と云ふもの
の解らないものゝすることは、ヘマにも見え、非常識
なやうにも、無責任にも思はれたのでせう。田山氏と
その青年と、年齢から云つても、地位から云つても、
その間には怖ろしく差異があつたのですもの、弱者
が強いものから壓迫されるのは、今も昔も、止むを得
ない事實なんだから仕方ありません。ですが「蒲
團」の主人公だと云はれた其爲めに、永代はいろん
な社會上の迫害を蒙つて、折角出来かゝつた職業など
幾度崩されたか知れませんが、本當に永代が田山氏のモ
デル通りの男でしたら今日獨立して生活して行く事も
出来なかつたでせうが、お蔭で文壇の方へは行きそび
れましたけれど、田山氏の勢力範圍以外でどうにかや
つて行つてゐるから不思議ぢやありませんか。

田山氏の主觀は絶對的か

處で私は、その頃の田山氏から度々手紙を頂いてゐ
ます。その手紙はどれもこれも皆、詫び状と云つた風

なもののばかりでした。

御身程師としての自分に盡してくれたものはない。
それなのに、その御身に對する師としての私の態度は
如何か。今度のラブだつて、立派に其温情なる保護者
たらんことを誓つて置きながら、事實は御詫びの致し
方もないことになつてしまつた。御身は定めし頼み甲
斐なき師とも思ひたまひしならん、許したまへと、例
の情にみちたやさしい書き振りで、坊主にならうか、
それとも戦争記念の髭をそらうか、御身の望みのまゝ
何れともする。けれどもそのやうな事にて、すべてが
許されるものとも思へない。小生は唯省みて慙愧に堪
へぬ——など細々と認められた。私はその手紙を讀ん
だ丈で泣かされました。たとへ内心今度の事につい
て不満はあつたにしろ、神様とも信じ敬ふ先生から、
こんなやさしいお手紙を頂いては、もう／＼有難くつ
て、いつそ勿體ないやうにさへ思はれました。

ですから何もそんなに詫びなんか仰有つて頂くこ
とはありません。先生は藝術家でゐらつしやるんだか

ら、モデル問題などの爲め、普通人の私の父母などがどんなに文句を云ひませうとも、そんな事に心を煩はしになる必要はありませんと云つて、返事を書きました。すると又、自分が煩悶してゐるのは、唯御身をモデルにした爲めばかりではない。御身の云ふ如く、モデル問題になやまされるのは藝術家の常で、仕方のない事だとあきらめてゐる。けれど、けれど、それ以外私は實に御身に對して相濟まぬ。此罪のつぐなはれる事なら、何でも御身の爲めに盡すべき勞を厭はぬつもりである。と折返して手紙が来た。

先生のそれ程までの煩悶とは何か、田舎の淋しい山蔭の町に居て、都をのみあくがれ渡つた私には、何の事だか察しもしつきませんでした。その後再度の上京後私はこんなことを云つたことがありました。

『先生、「蒲團」の永代は如何にしても可哀相なやうな書き方ね』

『だつて仕方がない、作者の主観にさう寫つたんだもの、仕方がないさ』

た達筆か何かのやうに表はされたのと同様に、永代があんな風に描かれたのも、つまりは詩化され過ぎたと云つた嫌ひがあるのかも知れませんが、兎に角、『蒲團』の私は大分お茶人呼ばりをされてゐるやうです。併し戀する當事者以外、わきめには、よくもあんな男を、女をと思はれ勝ちなもので、一概にお茶人呼ばりをした日には、天下は忽ちお茶人揃ひになつてしまふことかとも思はれます。

『縁』でも矢張り女主人公扱ひか

『蒲團』の出た當時には、まだ／＼あゝではない、斯うてはなかつたと思つた節々が澤山あつたやうに思つてゐますが、最う彼是れ一昔にもならうと云ふ今日になつては、何も彼もうる覚えになつてしまつて、具體的に書いて見ることも出来ません。それに手許に『蒲團』の持ち合せもありませんから、此方はこれだけにして『縁』と私に就いて云つて見ませう。

ですが正直なところ、私はまだ『縁』なるものを讀

先生の御返答は簡單でしたが、何だか周章てなやうな容子が見えました。私は直ぐに或る事を反問しようとしたが、それつさり黙つてよしました。作者の主観の鏡は出来るだけ磨き澄されてあらなければならぬ、一點の曇りもあつてはならぬ。と云ふのが、兼々先生の御主張であつた。作者の主観にさう寫つたのだから仕方がないさ』これによつてこれを見ると、私人の眼ばかりではない、多くの友人達が見て、本當の永代と『蒲團』に描かれた人物と、餘り違ひ過ぎてゐるやうに云ふそれは、戀人關係、友人關係たるの慾眼であつて、文壇の重鎮たる田山氏の主観の鏡は、絶對的なものなのかも知れませんが、何はしかれ、小説が藝術品である以上、多少材料の詩化と云ふことも必要なことと思はれます。子供の頃から、七面鳥と兄弟共からあだなをされた私は、如何にもよく顔色の變るヒステリックな女に違ひありません。併しその七面鳥を非常に表情に富んだ美人のやうに描かれ、まるで鳥の足跡にも似た私の筆跡を、さも／＼すら／＼と書き流し

んでゐませんでした。『縁』が『蒲團』の姉妹篇で、『蒲團』の後日譚だと云はれる以上、『蒲團』のヒロインであつた私は矢張り『縁』でもヒロイン扱ひにされなければならぬ事とせう。

五六年前この小説が初めて東京の某新聞に載せられた時、私達は北國のさる新聞社へ赴任することにになりました。東京の文壇で自分達が如何モデルにされてゐるか、詩化されて居るか、一切おかまひなしで居りますと、東京の友人達がおせつかいにいろんな事を報じて來た。『今日君はどうしてゐる』とか或は又『あなたは今昨日斯うしましたよ』など、ハガキで云つて來ますので、それによつてやつと、自分自身の消息を知ると云つた有様でした。それから東京に歸つて後もある友人の本箱に並んだ『縁』の製本振りを見ましたが、手に取つて開けて見る氣持になりませんでした。讀めば必らず癪に障るに相違ない！と何故だかこんな氣がして、何も強て癪に障る種を見つける必要もないと思ふのでした。

併しそんな事ばかり云つて讀まないとゐたのでは、この原稿を書くことも出来ません、仕方なしに友人が持つて来て、その儘本棚の隅つこに入れられてあつたのを取り出し、昨日から暇々に讀んで見ました。定めし癪に障るだらうと豫期してゐたのに、名代な神経屋の私が案外平氣であることが出来ました。「蒲團」のやうに、殊更ら詩化され過ぎたやうな節がないからかと云ふに、さうでもありません。作者の主觀にさう寫つたのだから仕方もないやうなもの、故意に手際よく寫り過ぎたのではあるまいかと思はれるやうな處さへちよい／＼ありました。一體此作者は眞ほど自然なものはない。作者たるものは一分一點の眞をも曲げてはならぬと云つた主義なので、私に限らず讀者は誰でも此作者の作物から、直ぐに或る事實をつかむ事が出来ると思つてゐるのです。ですが私達一家をモデルにしたのだと噂さのあつた「縁」は、或る程大體の筋道こそ左様かと肯かれますが、モデルは案外他にあつたのではないかと思はれる程で、それ故平氣で讀

み終ることも出来たのでせう。

とは云へ、世間では確かに私自身をモデルだと思ひ込んでゐる。それに「縁」の初めの書出しの方に、主人公の清が寺の友人と利根川を散歩する處でこんな事が書かれてある——その渡場には小さな小屋があつて、蘆荻が高く岸に繁つてゐた。渡船は今出ようとしてゐた。自轉車を慌てゝ載せてゐるものもあつた。船の中には此處らに見馴れない若い一人の底髪の女が乗つてゐた。其女は海老茶の袴を穿いて、細い蝙蝠傘を片手に持つて、片手には薄い二冊の書を持つてゐた。それは清が十年前にかいた「故郷」といふ小冊子であつた。その故郷の田舎町を、女は遠くからわざわざ見

て来た。——
前にも書いた通り、私は書生時代にわざ／＼先生の故郷を見に行つたものでした。

それからその女が師に背いて、戀人と一緒にやり、家庭を破壊して、一時師の監督の下に居るやうになつて置きながら、又昔の戀人のところへ戻つて行く。そ

の筋道から云つても、私は「縁」のモデルだと云はれても仕方のない經歷の女なのです。

見當違ひの復仇は迷惑千萬

恩知らず、義理知らず、どんな罵倒にも甘んじませう。「縁」の中にも繰り返し書かれてあるやうに、實際先生は私の爲めには随分苦しい思ひをなすつて下さつた。監督者と云ふ立場から、私の郷里の方へ顔向けのならないやうなハメにも立ちなすつた。私は相濟まぬ事だと思つてゐます。

ですが私は田山氏と私達二人と、斯う三人の事を考へますと、つい氣が焦立つて来て、何も彼もクシヤクシヤに引きむしつてしまひ度いとさへ思ひます。何と云ふ腹立しい三人なのでせう。「縁」の中の清の云ひ草ちやありませんが、私は生中弟子以上に盡して下さつたと云ふ先生の心が怨めしい。第三者の資格の無い自分と知りながら、温情なる戀の保護者たらん事を誓はれた田山氏が怨めしい。先生が單に弟子としてだけ愛し

て居て下さつたなら、私は或は忘恩の弟子にならないで済んだかも知れません。

私は恩は恩として、何處までも先生の御恩は感じてゐます。ですが怨みは怨みます。而も此怨みは、先生として以外の田山氏に對する怨みです。

——細かい心理状態は絶えず續いた。何處かに身を隠してゐる敏子と、牛込の山の手にある馬橋と、毎日社に出掛けて行く清と、この三人の心が、その時々によつて燃えたり、消えたりするのが分明と解るやうに思はれた。「鬼に角、自分はこの巴淵の中から脱するのには嫌だ、このまゝ放つてしまふやうな淡い心にはなれない。少くとも復仇をしてやらなければならぬ、鬼に角緒を入れやう、さうして置いて、その成行きを見よう」清はこんなことを思つて、獨りて激昂することあつた——

『少くとも復仇をしてやらなければならぬ』

お蔭で私達は家庭を破壊しなければならなかつた。その當時は永代も私も少くとも先生を信じ切つて、目に見えないからくりの縁にあやつられて居るとも知らず。いろんな藝當を演じさせられたものです。

先生と云へば私の前には神様も同様で、両親の云ふ事に背いても、先生の言葉には素直に耳を傾けた。私

は弟子として捧げ得られるだけの心を捧げたつもりである。ですけれ共一度戀の關係から山に籠つて、再度の上京後は、どうしても以前程先生に親しむことは出来ませんでした。『蒲團』に現はれた先生の心を、山蔭の町に居て否定してゐた私は、再び先生と相對するに及んで、もう一概に否定してばかりゐられなくなりしました。先生の書齋に居て、蒼白めたヒステリックな容子をして、絶えず物思ひに沈んで居た敏子は、決して馬橋との戀問題ばかりで、さうしてゐたのではありますまい。清と馬橋と、云はゞ戀敵さの間にあるのに、一途に師とのみ頼んだ清の許に身を寄せた、非常識な程清の心を知らなかつた自己の不明と云つた事などにも心を痛めてゐたのでせう。

——長い月日の下に、その感情が一つの空氣をかもしてゐたら如何しよう？其空氣が、一朝一夕に稀薄にしてしまふことの出来ないやうなものであつたら如何しよう？感情が感情を産み運命が運命を作つて行くのは、果してその當事者の罪だらうか。哀れむべき敏子』斯う思つた清の胸は、悲哀が潮のやうに漲つてゐた——

實に哀れむべき敏子、私もつく／＼さう思はずには

居られませんが、感情が感情を産み、運命が運命を産んだせゐか、今もなほ種々の壓迫を蒙つてゐる私達は、眞に困つたものだと思つてゐます。

——『自分が敏子を愛したと云ふ事が、斯うした三人の運命をつくる基となつたのは、それは事實だ。自分にも無論責任はある……それは自分も知つてゐる。しかし自分だつてこれに對して、随分多くの犠牲を拂つた。家庭の荒廢、心の荒廢、醫すことの出来ない精神の荒廢……』斯う思つたかれば暗然たらざるを得なかつた——

しかしそんな事に敏子の責任はない筈である。私は繰り返して云ふ。先生と私と永代と、この三人の事を思ふと、引つかさむしり度い程腹が立つ。

止して貰ひ度い空想的中傷

併しまあそんなに昂奮するにも當りません。昂奮するには當らないのですけれ共、これが普通一通りの作家の材料にされたのと違つて、いやしくも一分一厘眞を曲げてはならないと云ふ主義主張の、自然派の隊長たる田山花袋氏の作のモデルにされたのである以上、世間から作に表はれた馬橋や敏子の人格を通して、私

達それ自身を批判されなければならぬのが、如何にしても癢で堪りません。

例へば私達が家庭を破壊するやうになる前後の永代の心を忖度して、

——思ひつめた揚句、自分から斯う投げ出してふ事もあつた。

『もう、十分に精までなめてしまつたんだ。今になつて如何しようかそんなことは構ふことはない——』

など馬橋に思はせてゐます。田山氏程の秀れた作家には、人の心の奥の奥まで、千里眼のやうに見透かされるのでせう。すくなくとも自分では左様信じてゐられることとせうから、あながちにこの忖度が永代の人格を侮辱する爲めの言葉か如何か、そんな事を考へて書かれたものと言ふ譯でもありますまいが、萬事『少くとも復讐してやらなければならぬ』と云ふ氣持で觀察され、描寫された私達こそ、好い面の皮だと思ひます。従つて變な風に描寫された私達は、幾ら世間で『縁』のモデルだと噂をされても、『へい、さうてすかねえ』と苦笑してゐる外はないのです。

どうせ人格などメチャ／＼に叩かれて形なしにされ

て居ますが、それはそれとして置いて、最後に實際生活の上などについて、故意にどうかされてゐると思ふ點を少々辯解して置きます。

成る程年若くて家庭を持つた私達の生活は惨めなものに相違ありませんでした。文壇の重鎮としてゐる返つてゐられる老大家の眼から見たら、貰ひ乞食にも劣つた貧しさに思はれたとて無理のないことです。ですが實際の私達は、老花袋氏が氣の毒がつてゐて下さつた程貧乏でもありませんでした。

——馬橋はま／＼してゐた。汚れた女の綿入れを着て、袖の長いのをまくりながら、頻りに勝手元を出たり入つたりしてゐた——

これは私が初産をした翌朝の事ださうですが、幾ら貧乏したからと云つて、まさか良人に自分の汚れた綿入れを着せて置かなければならぬやうな、そんな惨めな目はまだ見た事がありません。

——産室にあるお三輪を山田が座敷で呼ぶので、暫らくして行つて見ると、口の缺けた土瓶に番茶が入れてあつて、茶湯臺の上には食糶鮑がごろ／＼轉がつてあつた。

『今朝は御飯は炊かないのかね』

『え、これで間に合せて置きました』
『奥さん。一つ何うです？』

馬橋が笑つて云ふと、お三輪は手を振つて見せた。お三輪はまだ朝飯前であつた。昨日の飯も残つてゐなかつた。

『御飯がなくつちや、何彼につけて困るでせう、私、炊いてあげようかれ』斯う云つてお三輪は勝手元に行つた。米櫃には一度炊く位の米しか残つてゐなかつた。

斯うなると、いつそ止して下さいと云ひ度くなる。

何と云ふ貧乏！と云ふよりも、私と云ふ女は、何と云ふ馬鹿なたしなみの無い女なのでせう。今日明日と云ふお産を目の前に控へて居つて、一度炊く位の米しか米櫃に残して置かないで、知らない顔でゐる。幾ら臺所の水仕の業になれなかつた私でも、その位の心得はお嬢様時代から教へられて居りました。お手傳ひに来て頂いた方へ、御飯をあげなかつたのは如何にも氣が利きませんでした。朝つばらの事で、おそばは駄目だとしても、せめておすしでも買つて来ればよかつたのです。お産で頓着してゐて、流石、作者の所謂男性と女性とを一緒に兼ねたやうな處のある、同居の親友山田も氣がつかなかつたのが残念です。それともそ

のすしを買つて来る僅かな金も、私達は生憎持ち合せてゐなかつたと云ふ寸法なのですかしら？

まだ、斯うした事を數へ立てれば、際限なくあります。紙數の關係上これ位で止すとして、一番しみに私が永代の處へ歸つて行くまでには、今一度先生との會見があつた筈です。實家の兄に逢つての後、其意見をもたらし、今一度會見の場があつた筈です。終生自分の支配下に置かうとする師弟關係以外、親子關係以外の人の處に居ようよりは、寧ろ良人の手に歸つて行くのが至當だと思はせられるやうな會見があつた筈です。博覽強記を以て自ら任ぜらるゝ田山氏の事です。それから、無論お忘れになつたと云ふ譯でもありません。まい。たゞ併し疳癪まざれとは云ひながら、同居の方にだんまりで出て行つた私も、不注意と云ふそしりはまぬかれ得ない事なのです。